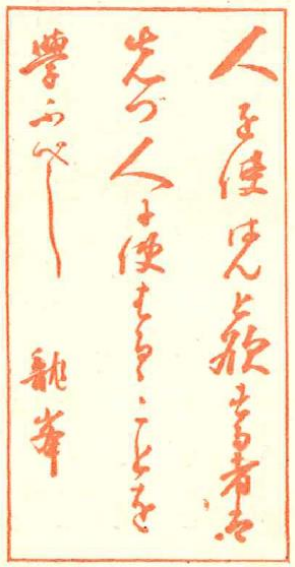
実業界の覇王 稲畑勝太郎翁少年時代

生きたる教訓、得難き修身書

文部大臣推薦

少年少女立志講座パンフレット



君塚勝彦著

＝別　名＝

「大鵬（おおとり）の巣に

ある頃」

【限定出版五万部】

大鵬の巣にある頃　中巻刊行に際して

昭和三年十月本会創立の精神に則り　各偉人の少年時代の努力奮闘史を『少年少女立志講座パンフレット』としてみな様の座右に寄せ、さらにはそれをまとめて十偉人を一巻とし『大鵬の巣にある頃』―【上巻】―と題し、刊行して萬天下より燃ゆる賛辞をよせられている本会は、更にそれが中巻を刊行する前提としてここに更に十大偉人少年時代の努力奮闘史をパンフレットとしてみな様の座右におくります。今回の十大偉人は、左の方々であります。御期待下さい。

理事会の再考により前回発表の分に訂正を加えました。

第一　武藤　山治翁
第二　木村　久壽彌太翁
第三　内藤　久寛翁
第四　団　琢磨翁
第五　小林　一三翁
第六　梶原　仲治翁
第七　稲畑　勝太郎翁
第八　馬越　恭平翁
第九　森永　太一郎翁
第十　山本　條太郎翁

最近の稲畑勝太郎翁

はしがき

著者識

一

如何なる方面においても、先駆者はもっとも苦しい道を辿らなければなりません。新しい道を開き、新天地をきりひらくことは、大きな労苦と犠牲とによってのみかち得られる賜であります。

それだけに先駆者の歩いた道は、開拓者の開いた新境地は、世にも尊い労作の結晶に外ならないのです。

わが実業界の覇王、稲畑勝太郎先生の如き、この先駆者の苦難をなめられたとうとい犠牲者の一人であります。

二

立志偉人として謳わるる人々の歩いた路（みち）は、生いしげったいばらの道であります。健気な決心の下に雄々しく起った少青年の進もうとする道を、苦しめ、さいなめすのが世の中であります。それに根強く反抗し、征服して力強く自己を生かして行った人こそ、私達が生きたる教訓として、得難き修身として仰ぐべき偉人であります。

わが実業界の覇王稲畑勝太郎先生の如き、その強き反抗者、雄々しき征服者であります。

三

孝心なくして幸福は得られません。努力なくして何の成功がありましょう。大廈（たいか）の成るのは決して一日の故ではありません。稲畑先生の今日あるのも決して一朝一夕の故ではありません。そこには血と汗と涙とに綴られた努力奮闘史が織り込まれているのです。先生は幼い時から如何なる逆境に立つとも少しも屈せず、日夜たゆまぬ努力をつづけられたのです。

四

努力は如何なる難所を征服する唯一の武器であります。孝心は幸福への唯一の曙光であります。身を紛砕しての努力と、涙ぐましくも美しい孝心とはかくして最後の栄冠への尊い礎となるのです。

稲畑先生の行く手は先生が七十歳になられる今日まで、一日として平坦な道ではありませんでした。山のような波乱が幾十回となく起伏し、或いは先生を倒さんとし、或いはその前途を塞がんとしました。しかし先生は敢然としてそれを征服してついに今日の如く有名な偉人となられたのです。

五

進む者に悲観は禁物です。先生の如く絶えず身に降りかかる数奇な運命にもてあそばれ乍らも、只彼岸の光明へと、一路邁進されてこそ栄冠はその頭に高く輝くのです。

どうかみな様は今著者が描き出さんとするこの涙ぐましい先生の孝心と屈してもやまぬ努力奮闘の精神を魂深く刻み込んで下さい。

六

云う迄もなく先生は、実業界に稀に見る人格者であります。そして部下を愛すること我が子の如くであります。徳の偉人として愛の偉人として、正しき偉人として世の凡ねき青年子女の崇拝と尊敬を受けています。

みな様はこの尊い先生の努力奮闘史を熟読されて、第二の稲畑先生、更に第三の稲畑先生になられて下さい。著者はそれを希いつつ筆を運びましょう。

P1

一

文久二年の十月、京都をめぐらす嵐山の紅葉が、その錦を競う頃、わが実業界の覇王稲畑勝太郎先生は、菓子の製造業を営む亀屋正重という豪商を父として、京都の中央でお生れになりました。

家は商人でしたが、父君の人望と、四隣に名だたる豪商と御用商人という名声の為めに苗氏名称も許されていました。

その豪商亀屋に、後にも先にもたった一粒種の男子として生れた先生は、世にも恵まれた若様でした。いつくしみの父母を初め、多くの召使達に取かこまれて、暑さ寒さも知らぬ幸福な少年でした。

しかし、幸福の神様は何時迄も同じ所に足をとどめてはおりません。よく『昨日の大臣、今日の乞食』といいますが、先生もその言葉通りの運命を辿らなければならなくなりました。昨日迄の栄華も今は淡い夢と化し、得意の絶頂から失意のドン底に叩

P2

き落されてしまったのでした。

それは元治元年（1864）子の年の大騒動で、会津藩士が京都を焼打ちした時、先生の家もその災難に遭い、さしもの高層を誇った先生の家は、二棟の大きな倉諸共　一物も残さず灰になってしまいました。それで父母は当時三歳の先生を抱いて着のみ着のままで命からがらやっと郊外に逃れました。

この大きな炎厄を境に、亀屋は一朝にして住む家もない、惨めな境遇になってしまいました。

多くの雇人達も一人減り二人減り、あとに残ったのはその日の食にさえ事欠く親子三人の惨めな姿のみでした。父君は、性来正直一途で少しも曲ったことをせず、しかも武士道で終始し、商人には必要な駆引も策も知らず、只正しきをもって本分とする方でしたので、一朝こうした不遇に叩き落されると、決して他にすがり求める女々しい心を出しませんでしたので、無一文、着のみ着のままをそのままに、京都三条大橋

P3

の東詰に小やかな家を借りて、そこで以前のように菓子の製造を始めましたが、旧とは打ってかわったみすぼらしい営業だけに、今迄の御用商人の名声はどこへやら、顧客という顧客はみんな他所の店にとられてしまって、誰一人注文してくれるものもありませんでした。

そこで一家は仕方なく、製造した菓子の風呂敷包みを背負って、町から町へ、村から村へと行商に出かけなければなりませんでした。

先生も八～九歳の頃から重い包みを背負って町から町と行商に出かけました。

『菓子の御用はございませんか、菓子の御用はございませんか。』

可憐な声が、朝霧をついて聞える初秋の或日もありました。身を切るような寒空に響き渡る冬の或日もありました。

冬の日、耳をもつんざく寒天に、足袋もなく股引もなく、剰さえ身につけるは破れ果てた寒布子一枚―身を切るような寒さと戦いつつ霜柱をざくざくと踏みつけ乍ら

P4

『菓子や、お菓子！！』

と呼び歩きました。朝早くから夜おそくまで……。そして幼なき先生に与えられる食事はというと、出先き出さきで一杯五文のウドンかけ只一つでした。

普通の人でしたら、豪家に育ったあまえた性質をそのままに、親達がいくら困っても、難儀をしても、犬ころを追い廻して遊びふけるのですが、根が孝心に厚い勝太郎少年はこうした終日のつらい仕事も一に父母の為め、家の為め、引いては自分の為めと思って、一度だっていやな顔をしたり、悲しい心を起したりするようなことはありませんでした。

風のひどい日や、雨の日や雪の朝などは、

『きょうはお母さん一人で出かけるから、お前は家に居て勉強しなさい。もし風邪でも引くと大変だから……』

とお母様にさとされても、

P5

『なあにお母様大丈夫ですよ。昔から子供は風の子といいます。これしきの寒さでこれしきの雨におののくようでどうします。私は男子です、こんな位なことに挫けやしません。それよりもお母様の方が大事な御体ですから』

と、云い放って雄々しく家を出るのでした。でもその勇気は、如何に不屈な精神のほとばしりであっても、まだいたいけな少年です。重い荷物と一緒に雪の中に吹き倒されたり、小さい手にやっとささえた笠を吹き破られることなどがあると、子供心にも急に悲しくなって

『お母様！！』

と、叫んでさめざめと泣くのでした。然し少年は勇子でした。負け嫌いでした。やおら立ち上がる、と

『何だ。これしきのことに泣くようでどうする。僕は男じゃないか、男だなら、男だなら泣くな、まだこの先、僕の一生の中には、この百倍も千倍もの苦しみ悲しみが

P6

襲ってくるのだ――。』

と自分自身を鞭打ってはげましました。

二

こうした辛い苦しい一日を終えて家にかえると、お父様に教えられて一心に勉強するのです。どんな寒い日でも火鉢一つなく、破れ障子の隙間から針のように入ってくる寒風の中に端然として

身体髪膚此れを父母に受け……。

と、可憐な声で孝経を読みました。しかし夕食から九時頃迄と与えられた勉強の時間ではとうてい勝太郎少年には満足を与えませんでした。それで少年はいつも夜の十二時一時迄も勉強しました。それなのに朝は二番どりが鳴くといつでも機械のようにはね起きて父母の手伝いをしました。

まだ夜の明けぬ中から雨戸をくり、家の中を立派に掃除してそれからお母様の為

P7

めに水もくみました。薪も割りました。お米の臼のバッタも踏みました。そして一家の健康な朝食がすむと甲斐甲斐しく身をかため行商に出かけるのでした。

こうした孝子をして神様はどうして何時迄も苦しめて置きましょう。一年二年と経つ中に何所の町でも、何所の村でも『孝子よ、健気な少年よ』ともてはやされるようになり、さては以前は大家の若様であったと、その家庭にまで話の綾がもつれると、我が子の亀鑑として、衆目の許した孝子となってしまいました。

こうしたことが原因の緒となって、一家の努力は赤貧の峠をこえて月々にはいくらかの貯蓄も出来るようになり、日を追って、その業は堅実を加えて行きました。

そして雇人も一人入れ得る迄になりました。一度亀屋を見放した幸福の神様はここに再び訪れ始めたのです。丁度その年でした。明治四年京都に初めて小学校が出来ましたので、形ばかりではあるが少々余裕の出来た父母は、その孝心を愛でる余り、小学校に入学させました。

P8

勝太郎少年の喜びはどんなだったでしょう。京都に初めてできた小学校にイの一番に籍を置くことの出来る身をどんなに感激したでしょう。少年は学校に入ると一生懸命、魂を打ち込んで勉強しました。その努力と負け嫌いとは常に級友にぬきん出ていました。

また勝太郎少年は他の学友達とはその勉強の仕方も異(ことな)っていました。他の子供のように只(ただ)本を読んだり字を書いたりするのみではありません。読んだ本の中から書いた字の中から『忠孝(ちゅうこう)』の二字を拾い出しては、それを魂深く刻み込んでいました。

学校からかえると、父母の為め以前のように夕食までは水をくんだり、お米をといだり、芋をおこしたりして手伝いました。そして夕食後は父母の夜業の傍らで勉強をしいろいろな有益なお話を聞きました。

その中には楠公(なんこう)の忠誠もありました。養老の瀧の話もありました。赤穂の忠臣義士の話もありました。少年はそのお話を聞く度に義に勇み、忠に燃えていました。父君

P9

の後ろに廻って肩を叩き乍ら

『お父様、僕も大きくなったらきっと偉い人になって天子様に忠義をつくしますよ。』

と健気な決心を物語った夕べもありました。

三

忠孝に燃えつつ勝太郎少年は勉強している中に、明治大帝にはしばしば幸臨(みゆき)あらせられましたが、その都度(つど)少年は作文や漢文の御前(ごぜん)講演をして大帝から御褒めを受けコンパスなどのごほうびを沢山頂きました。こうしたことのある度に少年の感激は一直線に勉学に進みました。そしてやがて花の四月、小学校の課程を終えました少年は卒業証書を高く差し上げて家にかえって来ました。

『お父様、お母様、有難うございました。今日無事に卒業が出来ました。そして席順は一番でした。』

P10

と感激のあまり小さい両の眼(まなこ)に涙を一ぱいためてお礼をいいました。

思えば長い年月(としつき)の間、父母が身を粉(こ)にして上げてくれた学校でした。お祭だからといって、お正月だからといって、お盆だからといって、一日としてたゆまずうまぬ一家の努力の賜物でありました。そして少年自身も、楽しい蝉取りの群れにも加わらず、蛍取りの愉快さも知らず、タコの糸を引いたこともなく、コマに鞭をあてたこともなく、只孝心一途の勉強の賜物でした。

『勿体ない。この卒業証書には一家の血と汗にかたまった強い真心(まごころ)がこもっている。真剣な血がみなぎっている。涙があふれている。粗末にしてはならない。』

こう思うと、勝太郎少年はクルクル巻きにしてあった証書をひろげて神棚に上げ、今までの幸福(しあわせ)と健康を謝し、尚今後の加護を小さい手に心からなる柏手を打って祈りをささげました。

こうして感激の中(うち)に、努力の孝子にはまたも幸福のきずなは糸を引いて訪れて来ました。

P11

それは勝太郎少年が十四歳の年でした。京都市に初めて府立の師範学校が出来ました。そして各小学校の俊才のみを選んで入学を許しました。その俊才中から更に甲生乙生丙生と分けて受験させられましたが、人一倍勉強家の勝太郎少年は、第一の成績で甲生に入学し、父母の許を離れて師範学校の寄宿舎に入ることになりました。

ここでも少年は他の学生の二倍三倍の勉強をしました。家にある父母や、妹達の身の上を思い乍ら、終日心に寸時の油断もありませんでした。

『お父様のお店は繁昌しているかしら、お母様のお体は御大丈夫かしら、妹も私にかわって孝行をつくしてくれているかしら……とそれからそれと、慈愛の父母の許にやさしい心を走らせては、自分がこうして勉強することの出来る幸福を感謝しました。感謝の念が募れば募るほど、少年の心は本にすいつけられて行きます。学友達は昼間のつかれかすやすやと眠って故郷(ふるさと)への暖かい夢路を辿っている時、少年はそっと起き

P12

ては、行燈(あんどん)に着物をかけてあかりが外にもれないようにして勉強しました。一頁読んでは息をころし、次の頁をめくりました。

こうして勉強をしている中に、勝太郎少年の身の上に大きな事件が起(おこ)りました。それはやがて学期試験が初まるという十二月の初めでした。

針をふくんだ氷のような比叡颪(ひえいおろし)がヒュウヒュウと物すごく音を立てて、硝子(がらす)窓を打つ深夜でした。見廻りの舎監(しゃかん)は提灯片手に各部屋を見廻って、やがて最後の部屋を出ようとして何心なく押し入れに眼をうつした時

『おやッ！』

と立ち止まりました。消灯後、火気一切を禁じてある寄宿舎に、殊に押入れの中に火の気がちらりと舎監の目に入ったのです。舎監は不審に思って、

『誰だッ！』

と誰何(すいか)しました。その鋭い声は深夜の中に響き渡りました。

P13

『押入れに居るのは誰だッ、出ろ!!』

というや、いきなり襖(ふすま)を強く開きました。その時

『先生ッ――』

と、舎監の前に両手をつき両眼に涙を一ぱいためた一少年がありました。

『先生、申訳ございません。』

少年は尚も一心におわびをしました。それは可憐な姿の勝太郎少年でした。

『何をしていたんだ。稲畑君、消灯後ですぞ。君は舎則を破って押入の中で、一体何をしていたのだ』

と鋭く畳みかけられました。

『ハイ、「世界国ヅクシ」（福沢先生の著者）を写しておりました。』

『教科書を写していた？』

『ハイ。』

P14

『君には教科書はないのか、教科書代として毎月五十銭宛府から与えられているのにその金を君はどうしたんだ。買い食いでもしたのかッ』

舎監は尚もはげしく詰問するのでした。

『先生、すみません、すみません。どうぞお許し下さい。私の家は貧乏です。私はやっと小学校を出ました。その間、お母様は僅か一銭の髪も結わないで、私を学校にやってくれました。それだのに、私は小学校を出ても家の手伝いをせず、こうして更に上の学校にやって貰っています。せめて日曜だけども家にかえって、手助けがしたいと思いますが、勉強に追われてそれも叶いません。それで私の働いた分として、毎月いただく五十銭を、お母様に送って家計の足しにしています。』

『そうかよく分った。先生はとがめはせぬ。もう泣くな、お前が泣くと先生も泣きたくなる。孝行をつくせ、教科書は私のを貸してやる。』

と先生も涙声になって、少年の肩に手を置き、

P15

『只舎則を破らぬように心掛けてくれ。』

と云い残して自分の室にかえられようとしましたが、またあとがえって

『稲畑君もう一言君に云うことを忘れた。君は決してこうして高イビキをかいてねている学友達の、富貴と幸福を羨やんではいけないよ。いや少しも羨やむことはない。貧乏は無上の財産である。それは君が今の決心を、何所までも押し通して行った数十年後に於いて初めて分ることだろうからね。』

と、老いの眼に涙一ぱいためて、恰も我が子にさとすようにいわれた舎監は、少年の顔をジーッと見つめていましたが、

『もう一時半だ、ねたまえ体に毒だよ』

と云い残してお室にかえられました。

四

こうした苦難をなめつつ専念学業にいそしんでいる中に、孝子には更に三度目の幸

P16

福が訪れて来ました。それは、勝太郎少年に仏国(ふらんす)へ留学を命ずる話が持ち上ったのです。

時は明治十年でした。畏(かしこ)くも明治大帝が御遷都遊(ごせんと)ばされた砌(みぎ)り、京都府に御下賜(かし)された産業研究の奨学資金で、従来京都の工芸品である織物、染物、陶器、美術工芸の類に、外国の工業法を加えて立派なものにしようとすることになり、ここに京都府下の優秀な学生八名を選んで留学させることになりました。その中には努力勉学の上に於(お)いては、決して人後に落ちない勝太郎少年が加えられたことは云う迄もありません。

その時勝太郎少年に第一に留学のことをつげて決心を促したのは舎監でした。舎監は勝太郎少年に対してその責任の重大なることもつけ加えられました。

少年の喜びは大変なものでした。何百人何千人もの学生の中から選ばれた八名の中に、自分が入ったのかと思うと、師範学校に入学したときの幸福と思いくらべて、余りにも恵まれた己が境遇が、恐ろしくなるような気もしました。

P17

思えばそれは本当に次から次と、矢つぎ早やに恵まれた幸運でした。身はたとえ豪家の息(そく)として生れたものの、その後の苦難は、とうてい文字にも言葉(ことば)にもいいつくせぬ余りにも惨めな生活でした。勝太郎少年はその夜寄宿舎の一室にとじこもって、それからそれへと思いを巡らせました。

『あの時、父母が本当に心から自分のことを思ってくれなかったら、今時分は矢張り以前のように菓子の小売小僧として、雪の中、風の中に働いていなければならないかも知れぬ。でもこのままなつかしい父母や妹と別れて、住みなれた京都の街を捨てて遠く海外に留学することは、光栄には違いはないが、行く人も残る人も本当に淋しいものであろう……。』

こう考えて来ると、父母の貧にやつれた姿が目に浮んで、さてはさめざめと泣きくずれてしまいました。その時勝太郎少年は『孝行』について二通りの行いを考えてい

P18

ました。それは、家にあって父母と一緒に働き、家計を助けてたとえ家は貧にただれていても、親子兄弟仲むつまじくその日その日を送ること、と、もう一つは一生懸命に努力して、父母や家の名をあげること、と、この二通りでした。

勝太郎少年は其の夜一睡もしないで考えめぐらした末、第二の方法をとりました。

『そうだ、僕は偉い人になって父母の名をあげよう。それが今自分の進むべき唯一の孝道である。』

そう決心がつくと、いよいよ留学の決意をかたくしました。そして明くる晩父母に報告すべく家にかえりました。でも家につくと今迄かたく握りしめていた決心がまたにぶりました。

家には小さい形ばかりのアンドンを一つつけて、父母はその薄明りの中に夜業(よなべ)をしていました。小さい妹は父母のかたわらに眠い目をこすり乍ら、あどけない歌をうたっていました。

P19

それを見ると少年は、若(も)し自分が遠く海外に出て行った後のことを考えて、さぞ両親が、力を落とすだろうことを想い浮べると、父母に喜んで貰おうと思ってかえって来た愉快な心が急に暗くなって、なんだか悲しい訴えをもってかえっているように思えてなりませんでした。

『このまま何もいわないで学校にかえろうか。』

という悲しい気持ちにもなりました。

でも勝太郎少年は先生からいわれた報告をしなければならない。父母の賛、不賛も聞かなければならないと、勇気を出して家に入って行きました。そしていきなり

『お父様、私に洋行しろといわれますが……』

これだけ云って父母の顔を見守ったのです。

『洋行！　誰が洋行させてくれるのか？』

父母はあまりのだしぬけにびっくりして問いかえしました。

P20

『ハイ　天皇陛下の厚い御思召しで、京都府から洋行を命ぜられたのです。』

『エッ』

父母はいい合せたようにびっくりして言葉もありませんでした。少年は今迄のことをくわしく話しました。お父様はその一部始終を聞き終ってから、やおら膝を進めて

『そうか、それは何という嬉しいことだろう。行け、行って来い。家のことは少しも必配はない。フランスに行って

天皇陛下の御鴻恩(こうおん)に報いるよう努力しておいで……』

と即座に賛成してくれましたが、お母様は嬉しさと淋しさと心配さとの涙が交錯して只泣くばかりでした。

少年も泣きました。妹も泣きました。一家手を取り合って泣きました。

泣くな、泣くな、…と、笑って励ますお父様も泣いていました。

P21

かくしていよいよ勝太郎少年は、富井政章博士などと一緒に、洋行することになりました。その一行八名を引卒して行く人は、フランス人でレオン・ジュリーといい、早くから京都府に招聘されていた人でした。

レオン・ジュリーは ナポレオン三世の時、長崎の領事をして居た外科医出の人でしたが、クリミヤ戦争の時に従軍して重傷を負い、後軍医をやめて教育界に身を捧げた人で、曽て仏国に日本最初の大使水戸民部卿を送る時一行の渋沢子爵を伴って案内役としてつれて行かれた人であります、

そのレオン・ジュリーは勝太郎少年を殊の外可愛がっていました。

五

その頃日本の時勢は、何れも天下を論じ、国家を語る青年や学徒が巾を利かせていて、軍人にならなければ政治家になるという気質(きしつ)が充(み)ちていました。それで海外などに行って職工の修行をするということなどは、唾(だ)気(き)すべきものだといって、勝太郎少年等はひどくいみされました。

友人達は寄(さわ)ると集ると、一斉に少年を罵倒し、嘲笑しました。

P22

『君は外国に職工の見習いに行くのだそうだね、腰ぬけ奴！何の為めに学問をしたんだ。職工だなんて男子のすることじゃない。それを君はやってはずかしくないとは思わぬのか。毛唐（けとう）の手下になって職工の見習いか。ハハッ……。楠公（なんこう）父子はさぞ地下で泣いているだろうよ。腰ぬけ奴（め）、骨ぬけ奴（め）。』

と、あるとあらゆる嘲笑を送りました。そんな時には何時も

『何をするのも、天皇陛下に忠義をつくし、皇国の為めに働く精神にはかわりはあるまい。僕は畏くも天皇陛下の大御心（おおみごころ）を奉じて行くのだ。』

と学友達をなだめていました。

× × ×

こうした罵倒と嘲笑を一身に浴び乍ら、勝太郎少年等は元気よく出発しました。そして途中無事で、いよいよフランスに着きました。一行は定められた年限を各自思い思いに研究することになったのです。

P23

勝太郎少年は、京都府から与えられた月々二十円の学資をもって、染色を研究することになりました。けれどもそれには色々の準備もいります。

少年たちはフランスのマルセイユについてから、語学を学ぶ為めに、約一ヶ年間、その小学校に入りました。その後一行は互の無事を祈りつつ別れ別れに目的の研究に向って進むことになりました。勝太郎少年は染色科学の研究にいそしむ事になりましたが、少年は考えました。身は　天皇陛下の厚い御思召でフランスに来ているのである。それも学問をしに来ているのではない。工業の研究に来ているのである。きれいな装（なり）をして、各染色工場を廻って歩いても何にもならぬ。それは実地にやらなければ本当の修得は出来ない。

そう考えた勝太郎少年は、工業学校で三ヶ年学習の後、菜（な）ッ葉（ば）服の職工を志願して、リヨンのマルナス氏経営の絹糸の染色工場に職工見習いとして入りました。

最初は十一時間勤務で、少年に与えられた仕事は雑役ばかりで、便所のふき掃除や機

P24

械の掃除や油さし等という小使のするような仕事でした。しかし何事にも忠実な勝太郎少年は、どんな小さいつまらぬ仕事でも、きたない仕事でも、只黙々として一生懸命にしました。そして町中では金が沢山かかりますので、リヨンの街から二里ほどはなれた、小さな村にあるカトリック教会経営の寄宿舎の一室を借り受けて生活をしましたが、朝の五時にはどうしても家を出なければ、工場の出勤時間（正六時）に間に合いませんので、毎日午前四時半には必ず起きました。そしてアルコールランプでコーヒーを沸かし、昨夜帰りに買って来た宵ごしの堅いパンをかじって、菜ッ葉服に着かえるや木靴を履いて雪の中、風の中、雨の中をひた走りに工場に急ぐのです。その間には乗物の便もありますが、勝太郎少年はそんなものには見向きもしないで、父母から貰った健脚を頼りに走るのでした。そして十一時間の辛い労働をしてから、また明日のパンを買って宿にかえるのでした。

こうして働いている中に、今度は職工の下仕事をする方に廻されました。その仕事

P25

は絹糸をシャボンでねるのと染め上った糸を川にかついでいって洗うのでした。勝太郎少年が糸を洗う役に廻されたのは、冬の中ばでした。

重い絹糸を籠一ぱい背中にかついで、工場の前の川に小舟を入れ、張つめた氷を割って糸を洗うのです。紫色にかわって腫れ上がった両手にホーホーと息をかけては洗いました。洗っても洗っても次から次と糸は運ばれます。舟の中から出ることが出来ません。寒い風は身を刺すように川面をすべって吹いて来ます。二時間三時間といる中に前掛けは凍ってかちかちになってしまいます。水のしぶきは菜ッ葉服を徹して全身にしみ込んで来ます。終りには自分の体とは思えないほど全身が凍ってしまうように思われました。

そうした時にはあまりの悲しさに思わず

『お母様ーッ』

と叫ぶこともありました。そうすると、故郷にあった時の幸福な姿が目の前に浮ぶ

P26

のでした。

よしんばそれは、その日の食に事欠くような貧しい生活であったにせよ。そこには慈愛の父母がいます。なつかしい妹がいます。食べるものは不味くても、着物はボロボロであっても親子四人が仲睦まじく過すことの出来たその当時を思い浮かべたのです。それだのにまだ可弱い少年の身をもって、数千里も隔てたフランスの国で、只一人、西も東も知った人はなく数千人ものフランス人の荒クレ職工の中にたった一人で働かなければならないのです。父と呼び、母と呼び、妹と呼び、兄と呼ばるる者は何所にいってもないのです。悲しいことがあっても、それを慰めてくれる友人はどこをさがしても居ません。悲しい時は一人で泣くのです。苦しいことも小さい身体に一人で苦しむのです。辛かったでしょう、悲しかったでしょう。京都に居た時は貧しさから足袋も股引きもなかったのですが、可愛がってくれる父母が居ました。いたわってくれる妹が居ました。慰めはげましてくれる学友が居ました。それだのに、それだのに、

P27

今の勝太郎少年にはそんな温かい人は一人もありません。泣いたでしょう。

『こんなことなら、フランスまでも出てくるのではなかった。』

と独りごったこともありました。然しそうした時にはすぐ、自分で自分の弱さを叱りつけました。

『何という意気地なしだ。これしきのことで泣くようでどうして偉い人になれるものか、男じゃないか、男ならなくな。』

と、自分自身に云い聞かせていました。

『今の自分の努力は日本帝国の為めだ。日本を仏国以上の工業国にせねばならぬ為めだ。一日の努力は百日の幸福への道程である。』と思いました。

『お父様もお母様も、今の私の働きを見ていてくださるに違いない。そうして喜んでいてくださるに違いない。みんな自分の為めだ引いては、父母の為め、家の為め大きくは皇国の為めであり天皇陛下の御為めなのだ忍び得ざる事を忍ぶのが真の男子だ』

P28

六

寒い冬の間をつめたい氷の中で過した少年は、その次の年の夏は熱い絹糸のねり場に廻されました。かまから上がった煮えたぎった糸を四階迄かついで行ってかわかす仕事です。エレベーターなどは一つもない、長い階段を朝から晩まで少しの休養もあたえられず働かねばなりません。煮えたぎった糸からシャボン汁のしずくがたえず体にぼとりぼとりと雨だれのように落ちて来ます。全身みな汗の中に顔をふくことも出来ません。大人と同じ分量をかついで終日働かねばなりませんでした。それは川の中で過した冬の間の苦しみにまさるとも決して劣りませんでした。

こうした苦しい時などは、すぐまた故郷のことを思い出しました。そして終日の仕事がおわった時など、あまりの苦しさに一ぱいのコーヒーと一片のミートが欲しくなるようなことがありました。そうした時にはすぐお母様のことを思い出しました。少年が家を出るとき、門口に立ってドンゴロス（粗麻織）前掛で顔を覆ってさめざめと泣かれ

P29

たお母様のお姿です。

『ああ、怠けちゃいけぬ。油断してはいけぬ。家ではお母様達が、僕がここで苦しんでいると同じようにお働きになっているのだ。』

そう思うと一片のパンもミートも欲しくありませんでした。

こうして一日として、片時として父母の身を思い、妹のことを案じ忘れたことなく働いている中に、やがて一年の星霜は少年の上に流れました。

その中に少しずつ職工の仕事もさせてくれるようになりました。

少年はやっと一人前の職工になれるのかとどんなに喜んだか知れません。しかし何所に行っても、大人同様の辛い仕事の上に少年には仕事以外に悲しい日が来る日も来る日もつづきました。

それはフランス人があたえる侮辱でした。数千人もの職工の中にたった一人の日本人である勝太郎少年は、常に侮辱や嘲笑のまととされていました。

P30

それはある日の昼休みの時でした。大ぜいの職工達は、勝太郎少年の周(まわ)りを取りまいて、

『おい稲畑、飯か、ハハハハお前でも飯をくうのか、どれどれ一体どんなものを食っているのか見てやろう、出して見い。おい。』

といってててんでに風呂敷包をあけるのでした。その中の一人がいいました。

『おやパンだよ、お前はパンを食っているのか。』

『エエ、パンを食べています。』

『これは驚いた。いや恐れ入ったね。パンを食うとは支那人にしちゃ珍しい。』

というのです。その頃、日本という国の存在は少しもみとめられては居らず、東洋の小さい国で支那の属国(ぞくこく)位としか思われていなかったのです。

『支那人ッ』

勝太郎少年はムッとして立ち上がりました。

P31

『ハハハハ　怒ったのかい。馬鹿野郎、貴様が憤ったって誰がこわがるものか、支那人に違いあるまい。支那人はねずみを食うというじゃないか、俺も今日までお前はねずみばかり食うていると思っていたよ。それが珍らしやパンを食うとは、おい、今日はお前の誕生日かい。』

とさんざんに罵倒されました。しかし勝太郎少年は只黙ったまま食事をすませるや、さっさと仕事にかかるのでした。

その夜少年が帰る道すがら、フト空を仰ぐと、マン丸い十五夜の月は皓々(こうこう)と照りはえていました。

『ああお月様だ。日本でも見ることの出来るお月様だ。お父様やお母様も今日は縁側で、この十五夜のお月様をながめていらっしゃるだろう。ああお月様、あなたの知っていられるように、僕は小さい小僧です。染色工場の見すぼらしい職工です。そして毎日一生懸命に働いて、一生懸命に勉強しています。しかしそれと同じように毎日み

P32

んなになぶられています。なぶられることはそりゃ嬉しかないさ。けれどもね、僕は平気ですよ、何事も忍耐です。今に見ていて下さい、私の将来を。きたない小僧と笑わないで下さいね。ナァに私は決して泣いてなんか居やしません。』

そういって勝太郎少年は、そっと涙をふき乍らニッコリと微笑(ほほえ)みました。

それから数日経(た)ってからのことでした。

また昼食の時に三十人ばかりの職工は、少年を取りまきました。そしてさんざんなぶった末、午後六時頃工場の薄暗い所につれて行きました。

そこには職工中での腕っぷしの強いといわれる二十歳前後両腕に刺青をしたフリゼー（チヂレ毛という意味で彼のニックネーム）不良青年が待っていて、勝太郎少年が入ってくると、いきなり鳥打帽子を取って、

『ハハハハ　お前には鼻がないね、頬ッぺたとすれすれじゃないか。支那人は赤ン坊の時に仰向(あおむ)けにねせないで、腑向けにねかしておくのだね。それで鼻がペシャンコに

P33

なるんだ。縦から見ても横から見ても鼻の所在が分らぬ。おいこっちに向いて見ろ、あっちに向いて見ろ』

とさんざんなぶった末、

『お前は先日パンを食ったそうだね、フランスはねずみが高いから食えないのかい。支那人のくせにパンを食うとはぜいたくだよ。明日から常食のねずみを食えよ。』

と更に先日のように罵倒しました。

七

勝太郎少年は一度ならず二度までも、支那人として罵倒され、ねずみを食うとののしられて、もう耐えられぬ侮辱を覚え、両の拳(こぶし)を握りしめていいました。

『支那人とは誰のことだ。俺は日本人だぞ、日本男子だぞッ』

と叫びました。

『ハハハハ　何をいうんだ、日本人も支那人も同じことだ。日本は支那の属国じゃな

P34

いか。』

『何にッ、属国だッ』

今はもう堪忍袋の緒が切れた勝太郎少年、今までは何といわれても笑いで答えて、我まんに我まんをして来たのだが、もう堪忍出来ませんでした。双頬はさっと紅を染め眼光はするどくその青年をにらめつけました。そしてツカツカとその青年の前に進みました。相手の職工達も碧い目をむいて、拳を握りました。雨か風か、異状な重苦しい沈黙が室の中にみなぎりました。拳を握って、その刺青の青年の前に立った勝太郎少年は、全身これ愛国赤誠の化身の如きものでした。

『おいもう一度いって見ろ、日本は支那の属国ともう一度云って見ろ。』

一語一語、赤誠の言葉は魂をついてあふれ出ました。

『日本帝国はな、畏くも万世一系の天皇を戴いている世界無比の神国なのだ。愛国赤誠の日本人の拳を喰ってみろ。』

P35

というや否やいきなり飛び上ってその青年をポカポカとなぐりつけ、ひるむ所を引っかついでドシンと投げつけました。そして

『おい、皆も掛ってこい。日本男子の腕っぷしを食ってみろ。』

と叫びましたが、少年の勇ましい態度に恐れ戦いて、何人も掛っては来ませんでした。戦いはそれで終りましたが、ここに大変なことには、勝太郎少年に投げつけられた青年は、耳を打たれ足をくじいたというので、その晩から大変な熱を出してとうとう入院してしまいました。

このうわさを聞いた勝太郎少年は、工場が退けるとすぐその足で病院を訪れました。

フリゼー青年はまたなぐりに来たのかと驚いてベッドの上に起き上りました。

「静かに」

少年は軽く会釈して、

「きょうはお見舞に参りました。いやおわびに来たんです。私の短気の為めに働き手の

P36

あなたが、病床に横わるなんてさぞ御家族はお困りでしょう。どうぞ許して下さい。」

「……。」

「私が短気だったのです。私は自分の本分を忘れていました。義務を怠っていました。私はフランスに工芸を研究に来たのです。それも自費ではない京都府から留学を命ぜられて来たのです。人一倍自重しなければならない身体(からだ)です。それを忘れて一時の感情に走ってあんな乱棒を働いてしまいました。私の不徳、只おわびするより外ありません。」

「稲畑君ッ」

「僕は、マルナスの工場に、染色法を研究に入ったのです。いわばあなたは私の師匠です。どうかお許し下さい。」

「稲畑君待ってくれ、もういわないでくれ、君にそういわれると、僕はどうしたらいいのだ。なんと返事をしたらいいのだ。こんなことになったのもつまりは僕が悪かったんだ。俺達が悪かったんだ。真面目に働いている君に、遺恨もないのに喧嘩をふっかけたのは僕達だ。稲畑君、君が怒るのは当然だよ。祖国を罵られて怒らぬ者はない。異郷にあって、淋しい生活をしている外国人を慰めようともせず、その祖国をののしった僕が悪かったのだ。稲畑君、謝罪などする必要はない。友人の中で誰一人見舞に来てくれないのに、君が来てくれたことはどんなに嬉しいか分らない。」

P37

といって夜具(やぐ)に顔を埋めて泣きました。

過ちを改むるに憚かること勿れ――。

みな様も学校で習ったでしょう。真に千古不朽(せんこふきゅう)のこの名言は尊いものです。勝太郎少年も自分の過ちを知って、喧嘩の相手の許を訪ねて深く悔いました。フリゼー青年も又勝太郎少年の至誠に動かされて、潸然(さんぜん)と涙にくれて悔いたのです。

そして今まで、二人の間に流れていた冷たい氷のような、そしてとげのように鋭い感情は一時にとけて互に心から暖かく結ばれたのです。

P38

やがて勝太郎少年はそこを去りましたが、それから隔日に必ず見舞をした上、月々の給料は全部袋のままフリゼー青年に送ってその全快を祈りつづけました。

この事が忽ち工場主や技師長はもとより、全工場の職工の耳にも入り、今までの冷遇酷使は消えて、工場内はこぞって勝太郎少年に温かい心を寄せるようになりました。技術もこちらから頼まないのに進んで教えてくれるようになりました。全工場の人気男になってしまはったのです。

そして少年は間もなく職工に昇進しました。職工になってから益々辛苦精励して、数年の中に染色術の蘊奥を極め、マルナス工場を辞しましたが、その後スイスや伊太利迄も行って種々研究しました。

八

丁度その頃でした。明治十六年にオランダのアムステルダムに、万国博覧会が催され、わが日本からも沢山な出品をしましたが、外国の事情が明るいというので、勝太

P39

郎少年は年二十歳にして助手として出品の種々な仕事をしました。

其の時六百円ばかりの高値の銅製花瓶一対を独逸の貴族が買いましたが、その運送方を依頼した同地運送問屋支配人（ジュデア人）は会期が迫っても少しも金をもって来ませんので、少年がかけ合いに行くと、大変すまないことだが、独逸人から貰った代金を途中で落してしまった。家には妻子も父母もあるので、この大金を賠償するとなると一家は路頭に迷わなければならぬ。どうか後生だから許してくれというのです。勝太郎少年は大いに同情して、その善後策を日本公使館の顧問シーボルトという人に話すと

「それは日本人を馬鹿にして金を着服すると云う芝居に過ぎない。」

というのでした。勝太郎少年は今までの同情が却って憤怒とかわり、

「金はぜひ支払ってくれ、そのかわり御礼として君の努力に相当する品を贈るから」

と談判しますと、その支配人は喜んで金をもって来ました。もともとシーボルト氏の云うごとくごまかしていたのですから、何の造作もなくすぐ翌日に届けたのです。で

P40

お礼として勝太郎少年は一銭位する張り子の虎を贈りました所、非常に怒って喰ってかりましたが、勝太郎少年は

「これが君の努力に相当なものだ。日本人は君たちにごまかされ、馬鹿にされるような者は一人も居ないのだよ。」

といってやりました。そこでも日本人の偉い所を欧洲人に見せてやったのです。先生は常に何事も争うことを避けたが、日本人の名誉に関する如きことは決してゆずりませんでした。こうしたエピソードも残して八年目に、二十二歳の若き身乍ら、押しも押されもせぬ染色化学の泰斗となってなつかしい日本にかえって来ました。

帰朝後は京都府の御用掛を拝命して、暫らく勤務いたしておりましたが、明治二十三年京都織物株式会社を設立し、この技師長となり、ここに滞欧八年間の蘊蓄（うんちく）を傾けて会社の為めに従事することになりました。

P41

が、何がさて日本最初の機械使用の絹織物染色会社である上に、渋沢栄一子爵や益田孝氏、大倉喜八郎氏などという方々が発起人として起たれたのですから、一片の出費申込書が二十円三十円と飛ぶように売買され、一口五十円の株券が百円二百円と売買されるという盛んなものでした。

その大会社の技師長になった勝太郎少年は、身を粉にして会社の為めに働き絹物のリョン黒染、絹糸の増量法、縞羽二重の染色等を創始し、何れも立派な成績をあげておりましたが、一方会社全体の成績は創立時の人気と反比例して余り香ばしくありませんでした。

九

と、会社創立後丁度三年目のことです。即ち明治二十六年の秋、少年も今は青年となり、元徳島藩の漢学者森重遠（もりしげとお）氏の令嬢で、元老院議員伊沢修二氏夫人の令妹（れいまい）にして、幸田延子さん達と同窓で上野の音楽学校を出られた登美子さんと結婚して僅かに一ヶ

P42

月目のことでした。

朝会社に出かけようと仕度をしていると、突然会社から一通のハガキが配達されました。それには意外にも

本日限り解雇候也

という免職の通知でした。

粒々三年、汗を流して働いた技師長を免職するのに一本のハガキとは……流石の勝太郎氏も驚きました。しかも結婚後僅かに一ヶ月、今は独身自由の体ではないのです。

「登美子、これを見ろ、私は遂に会社を免職になった。」

「エッ、免職に?」

「そうだ、粒々三年会社と生命を共にして来た私も、営業不振の責任者としてだ。こうなれば私はかまわないが、お前が気の毒だ。一文の貯金もない身で、明日からどこに

P43

勤めるというあてさえない体の主を持って、今後どんな苦労が身にふりかかるかも知れない。」

「何をおっしゃいます。夫婦は楽しい時ばかりのものではありません。苦しみを共にするのが当然です。僅か一ヶ月とおっしゃいましたが、翌日からの苦労も覚悟の前で参りました。働きましょう。明日から技師長の妻でなく、マエカケ姿で私も働きましょう。」

と健気な決心をして主人を励ましました。そして結婚の費用として会社から借りた五十円の金は夫人が着て来た嫁入りの晴着を売って支払い、ここに夫婦は無一文裸一貫のまま社会へ放り出されてしまいました。

十

さていよいよ会社と絶縁した勝太郎氏は、人に頼らず独立事業を企てることになり裸一貫を資金に、京都西陣の自宅の小さい土間に、染鍋一つを備えつけ糸染屋を開

P44

業いたしました。

昨日まで大会社の技師長として時めいていた人が、今日は夫人と共稼ぎで、昨日にかわる今日の商人姿で、厚司(あつし)を着て紺の股引を履いての顧客(とくい)廻り、登美子夫人はマエカケ姿の襷がけで、甲斐甲斐しく店の手伝いをして寸暇もなく働きます。

こうして昔を忘れた夫婦は身を紛砕して働きました。明けても暮れても只奮闘――只努力――寸時の油断もなく立働きました。

夫婦協力しての奮闘と努力は、必ずや報いられる日がなくてはなりません。やがて染屋も小僧一人追廻して幾分飯も食える様になって来ました。そこで仏国サンドニー染料製造会社と契約して染料の委託販売を始め、これも染料を背負って売り歩きました。こうした努力を続けること二十年一日の如き奮闘は……。夫妻の何物をも焼きつくさなければ止まぬ努力は……。遂に何ものをも焼きつくして、遂に今日の如く大稲畑(おおいなばた)の主となり、日本実業界の覇王として、大坂商業会議所会頭として関西の財

P45

界を一手に掌握するに至り、その名声こそ日本が世界に誇る大偉人として、四海に輝やくに至ったのです。

それにしてもこの大偉人の蔭に賢婦登美子夫人のあることを決して忘れてはなりません。

逸　話

稲畑先生は我が国染色界の泰斗でありますので、宮城御造営の時は御用掛として、玉座の色どりの考案は全部先生の奉公になっております。

かくの如く日本の染色界になくてはならぬ有名な偉人ですが、また一方には日本最初の活動写真輸入紹介者です。日清戦争の後でした。再度仏国に留学した時に、リョンのリミエルという人から映画の代理権を得、日本にもちかえって大坂の中村福助中村雁次郎等を主役にして、あらゆる苦心と研究をもって遂に日本独特の映画を完成し今日の如く隆盛になった映画界も一に稲畑先生の功労であります。

P46

それから日露戦争の前のことでしたが、英国がトランスバルの戦争で、カーキ色の軍服を用いて非常に成績がよかったので、日本軍隊もそれを真似ようとしましたが、どうしても思うように色が出ず、やっと出たかと思うと風雨に二三度も打(うた)れるとすぐはげてしもうという貧弱なものでした。それを稲畑先生が苦心研究の結果、今日の如くいくら風雨にさらされても少しもはげない堅固な色が出来上りました。これ一重に稲畑先生の御努力の賜であります。また只今全盛のモスリン紡績工業も先生の御研究によって初めて出来上ったのです。更に大きなことは、世界戦争の時、独逸からの染料が来なくなって大変に困った時、政府は補助金を出して日本染料会社を設立しましたが思うように行かず、会社を解散することになりました。その時皇国を思う稲畑先生はその不境な会社に自ら入り遂に現在の如き大会社にし、その上今日では独逸に決して負けぬ国産染料を作るようになりました。

かくの如く一に染色化学のみでなく、あらゆる方向に向って日本に貢献された先生

P47

は、只今七十歳の高齢に達せられましたが、尚まだ壮者を凌ぐ御元気で少年時代の魂をそのままに、皇国の為め　天皇陛下の為め一身を捧げていられます。

そして只今は貴族院議員正六位勲三等として政界にも重きをなしておられ、更にルーマニアの総領事を初め、ベルギー、ポーランド、ボリビア、ポルトガルの各国の領事を兼任されています。日本人にして外国の領事になられたのは稲畑先生が矯矢で如何に諸外国に対しても、大きな信望があるかが分ります。

只今稲畑先生が持たれている勲章だけでも、

勲一等　ルーマニア大宝章、仏国カンボジア大宝章

勲二等　ポーランド、チェコスロバキア、ボリビア、ベルギー、ローマ、安南

勲三等　日本、支那、ベルギー、チュニス、仏国レジョンドール

勲四等　世界各国

其他褒章、緑綬褒章、紺綬褒章、仏国文数大学章

等ととうてい胸間にはつけることの出来ないほど沢山持たれています。これを見ても先生が如何に世界各国の融和をはかり貢献されているかが分ります。

先生の邸は只今京都市にありますが、そこにはシャム両陛下、英国の第三皇子ジョッフェル将軍、印度支那の前総督ルーム一行、メルラン一行、ルーマニアのカロール殿下（現皇帝）その他各国大公使で一度日本に足を入れる方々は、一人残らず稲畑先生を訪ねられています。稲畑氏も国民外交を自ら任じ国際親善に努力されているのです。何という力強いことでしょう。かかる大偉人を日本が持つことは世界に向って鼻が高い思いをします。これというのも先生の屈しても止まぬ努力と、涙ぐましい忠君愛国の賜であります。どうか皆様はこの尊い努力奮闘史を紐解かれて励んで下さい。努力して下さい。稲畑先生に出来得たことが皆様に出来ない筈はありません。稲畑先生も人であり、みな様もまた人であるのです。

…（おしまい）…

昭和六年二月二十五日　印刷
昭和六年二月二十八日　発行

定価　金十銭

著者兼発行者　君塚勝彦

印刷所　霊岸小学校附設授産場　霊岸印刷所
東京市深川区霊岸町一五七番地

発行所　こども教育読物出版協会
東京市外千駄ヶ谷町穏田一
振替東京七六二〇九　電話青山〇一八四

大売捌

東海堂　菊竹金文堂　富貴堂
北隆館　川瀬書店　煥呼堂
上田屋　柳原書店　目黒書店
東京堂　弘明堂　谷島屋
大東館　大阪屋號　金港堂

本書刊行賛助の方々

衆議院議員　降旗　元太郎
衆議院議員　山崎　達之輔
前文部次官　栗屋　謙
元九大総長　眞野　文二
貴族院議員
工学博士　小田川　全之
日本女子大学　麻生　正蔵
校長
東洋大学教授　高島　米峯
日本少年禁酒　守屋　東
連盟長
教育博物館長　伊藤　傳右衛門
三共製薬社長　秋保　安治
貴族院議員　塩原　又策
東京府立第一　徳富　蘇峰
高等女学校長　市川　源三
貴族院議員　服部　金太郎
東京女子高等　倉橋　惣三
師範教授
松竹社長　大谷　竹次郎

貴族院議員　大川　平三郎
東京市教育局　木村　久壽彌太
長　藤井　利誉
男爵　安川　敬一郎
東洋家政女学　岸邊　福雄
校長
枢密顧問官　金子　堅太郎
国際通運社長　中山　太一
中野　金次郎
貝島商業社長　中野　昇
貝島乾鎔社長　貝島　太市
中山　健治
山脇高女校長　貝島　豊吉
山脇　房子
小倉石油社長　小倉　常吉
元文部大臣　岡田　良平
子爵　渋沢　栄一

・本、著作物の複製物は、著作権法第67条第1項の裁定に係る複製物であります。

・裁定のあった年月日：2018年9月26日